

海外登山の記録

カラコルム デイラン峰

日時: 1965年

メンバー: 塚本圭一、小山貢、高田直樹、上田純三、他6名(京都府山岳連盟)

概要: 塚本、小山、高田、上田らは京都府山岳連盟の一員として、未踏のカラコルム・デイラン峰を目指したが敗退した。京都府立大学山岳部として、海外登山を試みた山行であった。登山の内容は、ドクターとして参加した作家・北杜夫氏によって、『白きたおやかな峰』という表題で小説化されている。

記録

カラコルムは中国領パミールと共に私にとっては終生の山々であった。いま、懐かしく今西錦司先生の『カラコルム・探検の記録』(1956)を開いて読んでいる。今西先生の文章はわかりやすく内容は大胆である。その先生に私のK2本を差し上げたとき、「君の文はわかりやすい」と褒めてもらった。先生の『カラコルム』のおかげでカラコルムの山々の自然の理解が早かった。

1963年に私は山岳部の上田純三さんとカラコルム山域の調査と登山許可申請に出かけたのであるが、言葉の壁と宗教の壁があってそう簡単ではなかった。最初はK6を目標にしたが、デイラン峰に許可が下りて慌てて「どの山だ!」と探したのである。上田さんは小松明德先生のところで畜産学を専攻していたので、カラチの屠殺場なども調査していた。

1965年デイラン峰隊: 小谷隆一、塚本圭一、北杜夫、松田禎夫、小山貢、中山幹夫、高田直樹、高橋正、土森讓、上田純三、キャプテン・サファーズ。

登山の内容はドクター北杜夫の小説『白きたおやかな峰』(1966)に語られている。この本で登山の道に入ったという青年もあった。

頂上に立つことは出来なかったが、それぞれにいろいろな学習が出来た登山であった。ヒマラヤ登山のテキストとなるものも少なかった時代だが、デイラン峰登山の中では雪崩、登攀ルート、タクティクス、氷河の変化など多くのものを学習できた。装備、登攀用具など高田さんの新しい開発もあった。さらに、イスラーム圏でのマナーも重要な学習事項であった。

私は「西部カラコルム Minapinn 氷河周辺の生物生態」というレポートを書き、今西先生の言う山の牧場を確認し、食糞性コガネムシ類の調査も出来た。

隊員の土森讓さんは1997年、カラコルムのスキルブルム7360m登頂後、ベースキャンプで雪崩の爆風で遭難死された。

(記/塚本)

